赤煉瓦のある風景 ―青柳登記所―

青柳登記所（赤レンガ倉庫）　版画／二川秀臣

ひと昔前までは赤煉瓦の塀が多かったが、いつの間にか減少し、ブロック塀に代わってしまっている。赤煉瓦といえば、赤煉瓦館、赤煉瓦の橋梁、赤煉瓦塀と文明開化の懐かしい雰囲気が漂っている。

福岡市天神の赤煉瓦文化館（旧日本生命館）の洋館は赤煉瓦館のシンボルであり、国の重要文化財に指定されている。

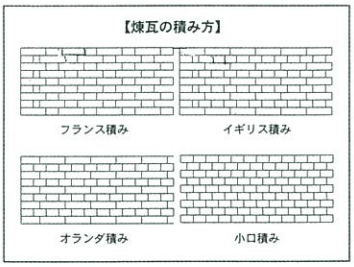
煉瓦は色から白煉瓦と赤煉瓦があり、前者は耐火煉瓦に、後者は建築用に使われている。赤煉瓦の最も古いのは、幕末の安政４（1857）年、長崎鎔鉄所は赤煉瓦を焼成して建設された。明治初期の文明開化と共に、官営工場や、官公庁舎、牢獄、学校、倉庫等に赤煉瓦が使われた。しかし耐火性はあるが、大正12（1923）年の関東大震災で耐震性に弱いことが分かり、赤煉瓦造りは次第に減少していった。

青柳登記所

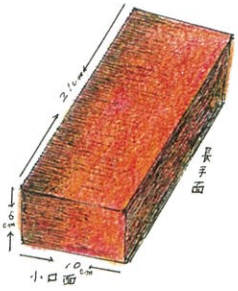
赤煉瓦の製法は、木枠の中に粘土を詰める「手抜き」工法であったが、明治20年代には、機械で押し出された粘土をワイヤーカットする工法に変わり更に機械化が進み、大量生産されるようになった。

煉瓦の大きさは幕末の頃は、厚みが薄く4㎝ほど、明治になると4.5㎝と少しずつ厚みを増してくる。大正14（1925）年に、JES（日本技術標準規格）は厚さ6㎝、幅10㎝、長さ21㎝となった。

青柳登記所の煉瓦積み（イギリス積み）



日本近代文化遺産を歩く（JTBキヤンブックス）



煉瓦の積み方は、フランス積みとイギリス積みがある。前者は長手面（6㎝×21㎝）と小口面（6㎝×10㎝）が交互に並べられて、各段が積まれる。

後者は長手面が続く段と、小口面が続く段が交互に積まれる。これは最も一般的な積み方で、煉瓦造りの大半に採用されている。それ以外にオランダ積みは、ほぼイギリス積みと同じであるが、建物の角の部分で煉瓦の処理が異なる。日本ではフランス積みが幕末から明治10年代頃まで、それ以後はイギリス積みやオランダ積みとなっている。

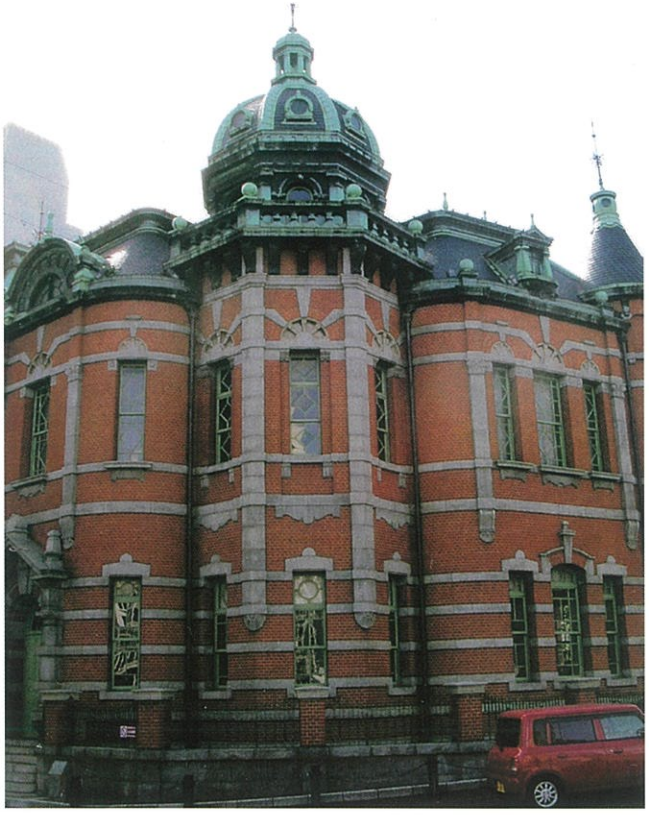
青柳登記所は、明治20年、従来戸長役場で取り扱っていた公證の事務が、司法省の管轄となったことにともない、箱崎、篠栗と同時に開設され、明治23年、青柳、立花、小野、席内、新宮、和白の6村を管轄する福岡区裁判所青柳出張所と改称された。その後、昭和12年9月に現在地（青柳町1053-1）に新築移転した。

（青柳村誌）

登記所の赤煉瓦倉庫は、登記簿などの重要書類を保管したものである。赤煉瓦は耐火性があり、この倉庫は中空の二重積みになっている。

煉瓦積はイギリス積みである。

参考文献、青柳村誌、昭和15年（1940）



赤煉瓦文化館

平成20年3月31日発行　　古賀市教育委員会